
FIVE CAT

セラ トワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FIVE CAT

【Nコード】

N6673D

【作者名】

セラ トワ

【あらすじ】

長野県の、とある小さな児童福祉施設に暮らしている少女達の物語。それぞれの少女達の物語が、やがてCATとして結び付き、繋がりが……。大人になった少女たちの人間模様も必観。

CAT集合

『CAT集合』

「キュツキュツ」と古びた床が歩く度に音を出す…「懐かしいわね…」一人の女性が目を細めながら辺りを見回した

ここは誰も使っていない昔幼稚園だった建物。かなり昔の建物なので、木造の平屋みたいな作りだった。「まだ残ってるなんて…」女性はそう呟くと、少し笑った。

古ぼけた、旧幼稚園の正面玄関からは、小さなグラウンドが見え、小学生位の子が3人、バスケットボールをしていた。

手作りであろう、バスケットゴールを金網に針金で固定し、皆、一生懸命ボールを入れていた。

その子達の声は、古ぼけた幼稚園の中まで聴こえ、女性はその声に耳を傾け、また少し笑った。

「…遅いなあ…」そう呟くと女性は体をさすりながら、小さな椅子の水コリを払った。

季節は春を迎えていたが、まだ肌寒い。何しろ長野県のある山の麓なもんだから、まだまだ寒い日があったりするのだ。

女性はゆつくりと小さな椅子に腰を掛けた…と同時に「ここ!!」「ここちゃん!!」女性を呼ぶ声がした。

「愛里!!花乃!!」（あいり、かの）女性は…そう、ここは慌てて立ち上がり、二人の元へ駆け寄った。「元気だった?」三人共、同じ言葉を発し、互いに抱き合った。「珠希と凧は?」（たまき、

なぎ）愛里は辺りを見回した。「珠希は来るでしょ！！でも、風は難しいかもね…」とこは言った。

しばらく、三人で雑談していると、先程の小学生らが何やら叫んでいる。

「スッゲー！！」「マジかよ！！」「サイン下さい！！」などと騒いでいた。

「もしかして…」三人は顔を合わすと、外に出て行った。

黒塗りベンツを後にし、今人気絶好調の歌姫、S A R A N A がこっちに向かって歩いていた。小学生らは、いつの間にかサインを貰っていた。何故かズボンに。「俺、明日学校に履いて行く！！」と叫んでいた。

「ヨッス！！お待たせ！！」笑顔で片手を挙げるとS A R A N A が駆け寄って来た。「風！！相変わらずだね！」花乃が笑顔で出迎えた。

風を出迎えて、しばらくすると、「ごつめーん！！」と珠希が駆け寄ってきた。「風も来れたの！？大丈夫なの！？」珠希は風を見て驚いていた。「第一声がそれかよ！！」と風が突っ込み、皆で笑った。

「ねえねえ、あの絵見に行こうよ」愛里が待ちきれなさそうに言った。「そうだ！！先に来ただ、まだ見てなかった！まだあるかなあ？」ここが言った。

五人集まった事だし、さっそく古ぼけた旧幼稚園に見に行く事にした。

五人でここに入るのは何年ぶりだろう？「ふっるーい」だの「本当に久しぶり」だの各々感想を言いながら移動していった。

「あっ！残ってる！あるある！」ここが指を指した。

指を指した先には、壁があり、そこには猫の絵が描いてあった。猫の絵の近くには五人の名前が書いてあった。どうやら、自分を猫に見立てて、こんな猫であろうと描いたものらしい。黒のマジックで、きっちり描いてあるその絵は、色あせる事なく、まるでつい最近描いた様な絵だった。

「あははっ！本当に懐かしいね！絵めちゃくちゃ下手くそだし。」
愛里が絵を撫でながら言った。「字も汚いね。」凧が言った。
皆、自分達が描いた絵を撫で出した。

心がああの頃に戻りだす。
一緒に過ごしたああの頃に。

「猫の様に生き、猫の様に死のう」そう言って、CATとして仲間になったああの頃に……。

「話したい事がいっぱいあるんだ…」誰かが呟いた

「」

『』

あたしの名前は「こ」漢字は無いの。

あたしは『児童養護施設』っていう所に住んでるの。親が居なかったり、訳あって此処に来た子供がたくさん住んでるの。

あたしは赤ちゃんの時に捨てられてたの。「此処に捨てられた。」だの「此処に居たんだよ。」って、それで名前が「こ」単純。

辞めていった保母さんが教えてくれた。

この施設は、小さい子供から高校生まで、男女合わせて35人位居るんだ。

面倒をみってくれる先生は確か12人位。男の先生は5人位で、後は女の先生。

あたしは可愛くないの。この前、中学生の男の子に「可愛くないやつ！ブスッ！」って言われた。嫌われ者なんだ。

多分、あたしは先生達にも嫌われてる。

…なんで嫌われてるか知ってるよ…。外見もそうだけど、中身もブスなんだって！！

笑わないし、喋べらないし、嘘ばかり付くし。もう小学校6年生だから、自分でもわかってる。

だって、笑えないんだ。何も面白くないし、何を笑う必要があるか分からない。喋っても誰も話し聞かないよ？喋るだけ無駄。

嘘は本当にそうなって欲しいから言うだけ。例えば、「あたしのかーちゃんは女優やってて、仕事が忙しいから、あたしは此処にいるんだ！お前らなんか、殺しやのとーちゃんに、明日にでも八つ裂きにされるよ！！ザマーミロ！！」ってね。

髪は短く切った。長いといじめられた時、引つ張られるから。

こんなんだから、可愛くないから、いじめられるんだ。可愛いがられないんだ。分かってる…。でも、どうしていいか、どう在るべきなのか分からない。

もう少しで3時のおやつだけど、今日もきつと獲られる。

大人になったら、ケーキを丸ごと一個、独りで食べるんだ！！一番おっきいの！！

でもね、あたしみたいなのにも、優しくしてくれる先生が居たんだよ。松井先生って言って、女の先生。

おやつ獲られると、松井先生がこっそり、いつも貰ってるおやつより、凄くいいお菓子をくれるの。「内緒よ。」って言って。頭を撫でながら…。

施設では暗黙のルールみたいなのがあって、先生達はひいきをしちゃいけないんだって。

でもね、あたし思うの。沢山の子供達を、皆同じ様に愛せるわけ

ないって。

先生達、あたしの事、可愛がってくれないでしょ？

でもね、松井先生だけはあたしを可愛がってくれた。あたしの嘘の話も、悪い事しても謝らない時でも、優しくしてくれた。

「貴方は凄く可愛い子よ。本当はお利口さんなの。貴方が意地を張るのは、大人がいけないの。先生がいけないの。」って、頭を撫でながら言ってくれた。

あたし…凄く温かい気持ちになったよ。

でも、松井先生は、あたしが 小学校3年生の時に結婚して辞めちゃった。

先生、辞める日に、あたしをギュッて抱きしめて、泣いてた。「ゴメンね」って言って。

あたしは何て言っていていいか分からなかった。悲しいけど泣けなかった。

どうしても泣きたくて、泣く場所を探したの。トイレもお風呂場もダメ…。本当に、大きな声で泣きたかったから。

いい場所思いついたの。昔、幼稚園として使ってた所があって、誰も近寄らない所。グランドの脇にひっそりとある、あの古い建物。皆はおバケが出るからあそこには絶対入らないみたい。

あたしはオバケとか信じてなかったし、怖くなかった。オバケの本をいっぱい見たし、怖い話も大好きだった。だから全然平気。

先生達は入っちゃダメって言っけどね。

さっそく、そこに行った。時々、先生達が要らない荷物を置きにくる位で、中はホコリ臭い匂いがしたけど、気にしない。

教室みたいな部屋と、多分、職員室みたいな部屋と、トイレと手洗い場。

それぐらいしかなかったよ。

教室みたいな部屋に、小さな黒板と、小さな木の椅子、机がちょこんちょこんって置いてあった。

あたしは黒板に、松井先生の絵と、ケーキの絵を描いて、空想の世界に入ってた。

松井先生があたしのお母さんで、ケーキを作って待っててくれる……
いっぱい泣いた。声もいっぱい出した。

今日から此処はあたしの秘密基地。

その日から、あたしは古ぼけた教室を少し綺麗にして、毎日と言っている程、学校から帰ると入り浸った。空想の世界で遊んでた。

今日も今からそこに行くの。

辺りをキョロキョロと見渡して、走って向かう途中、後ろからあ

たしを呼ぶ声が聴こえたの……。

『ごごちゃん！！』

珠希

『珠希』

「珠希〜！一緒に学校行こう！」愛理の声だ！！早く用意しなきゃっ！

私は珠希。今小学校6年生。愛理も一緒の学年なの。私は、児童福祉施設と言う所に住んでいるの。

今から学校に行く所。

「先に玄関に行ってるからね〜！」「お姉ちゃん待ってえ！」愛里と愛理の妹、花乃の声がする。愛里とは幼なじみ。花乃とも仲良し。

私は小学校2の時に、ここに連れて来られた。お母さんが運転する赤い車で、少し遠くの町からやって来た。

お母さん、車の中でずっと泣きながら「ゴメンねゴメンね。」って言ってたのを覚えている。その前の事は良く覚えてない…。

私はお母さんとどんな風に暮らしてた？お父さんは？

忘れちゃった……。どうでもいつか！！

私、学校にも友達いっぱいいるんだ。

自分で言うのも、なんだけど、明るいが取り柄かな？勉強も好きだし、スポーツも、もちろんお洒落も。

セブンティーンって言う雑誌が好きなんだけど、買えないから、
毎号友達が読んで要らなくなったたら貰ってるの。

貰った次の日に、新しいのが出ちゃったりするけどね…。

「何してるの？ボーツとして？早く歩かないと遅刻するよ？」愛
里に怒られちゃった。

「ねえねえ、昨日の夜、先生達が話してるの聞いたんだけど、新
しい子が入るんだって。」愛里が後ろ向きに走りながら言った。危
ないのにね。

「えっ！本当！？男？女？どっち？」ここまで聞いたら、近所に
住んでいる友達と合流しちゃったから、それ以上は話せなくなっ
ちやった…。あたしも、愛里も、暗黙の掟っていうのかな…。施設の話
は他の子の前ではしないんだ…。新しい子の話し気になるけどね…。

気になって、勉強が手に付かないかも…。

他にも気になっている事があって、あまり話した事のない子が
いるの…。「ここちゃん」って言う子なんだけど、いつも一人で学校
に行って、帰って来てもあまり姿を見たことがなかった。

周りの皆は、「気持ち悪い」だの、「ホラ吹き」だの「オカルト
少女」って言うってたけど、私は何となく可愛いと思ってた。愛里に
も言っていない事だけ…。

小さくて、色白で細く、真っ黒なおっぱ頭。いつも下を向いて
るけど、実はパツチリした目をしている。私は本当は可愛い子なん

だと思った。

後、強い子だと思った。

いつも帰って来てから、姿が見えないと思ったら、何とあのお化け屋敷に一人で入っていったの！！誰も入っていかないのに！！

今日こそは、学校から帰ってきたら喋りかけてみようつと………。

私は、新しい子が入って来るっていうのと、今日こそはここにゃんに喋りかけなきゃっ！て事で、授業はほとんど上の空だった。

やっと学校が終わった！！「バイバーイ！また明日ね。」って皆にお別れして、私は駆け足で校門まで走った。

途中で愛里とすれ違って、お先につて言った。愛里はクラスメートの友達と一緒に帰っていたので、少し安心しながら走った。

ここちゃんに喋りかけるなんて知ったら、愛里反対しそうだから。

施設に帰って来て、ここちゃんの下駄箱を確認。「帰って来てる！」

何だか探偵になった気分。ここちゃんが何をしているか突き止めるなきゃ！

まず、自分の部屋に行き、ランドセルを置いた。

「お帰りなさい、たまきお姉ちゃん。後でえほん読んで。」この

子は同じ部屋の奈々ちゃん。小学校1年生。妹みたいに可愛がってるの。

後、2年生の子と4年生の子も同じ部屋なんだけど、まだ帰ってきてないみたい。

女子寮、男子寮と分かれてて、各部屋にルームメイトが4人〜5人居るの。

部屋が狭いから、窮屈だけど、施設の暮らしは嫌いじゃなかった。

自分の家で暮らすよりは、マシだと思った。

何でそう思ったんだろ？

いけない！！早くここちゃんの部屋に行かなきゃ！喋れなくなっちゃう！一人でお化け屋敷に行っちゃう！！

ここちゃんの部屋の前まで来た。ノックをしようとしたけど、何て話しかけたらいいか、急に緊張してきちゃった！！

そもそも、私何でここちゃんに喋り掛けようと思ったんだろ？興味があつたから？何でだったっけ？

とにかく、部屋をノックしてみよう……『コンコン』木で出来た引き戸をノックした。

「はい？」中から声が聞こえたけど、ここちゃんじゃない。

「ここちゃんいる？私、珠希。」って言いながら戸を少し開けて

みた。「こっこちゃんはどこかにいきまっ、行きましたでしょう。」 早紀ちゃんという子が居て、教えてくれた。

早紀ちゃんは、知的障害者。養護学校に通ってて、本当は中学2年生なんだけど、同じ年の子達とは合わないから、小学生の子達と同じ部屋なの。

「そうですか。ありがとう。」と早紀ちゃんにお礼を言って、また走った。

急いで靴を履いて、グラウンドまで走った。

いた！！こちゃんはお化け屋敷に向かって歩いてる。辺りをキョロキョロしながら。

私、おもいつきり大きな声で呼んだの！！

「こちゃんー！！」

こちゃんは私の方を振り向いたけど、走ってお化け屋敷に行っただ。

私も走って、こちゃんの後を追った！！こちゃんが窓からお化け屋敷に入って行ってしまった。

私も勇気を出して、同じ窓から入って行った。少し窮屈な窓から、体を押し出しながら、中に入った。

「こちゃんーん……。」そう言って辺りを見回した。廊下には使わなくなった畳やら鍋やら、布団などが散乱していた。薄暗くて、ホ

コリッぽい。 やっぱり、此処は怖い所なんだ。 オバケが居る…。

ここちゃんの気配がしない…。 怖い。

「ここちゃん、私、前から友達になりたくて…えっと…前から気になってたの…。 此処でなにしているのかなあって。」 怖いけど、少しずつゆっくり歩きながら、ここちゃんに聞こえる様、話し掛けたの。

「ここちゃんゴメンね。 勝手に入って…居ないの？」 もう此処から出ようかな…。

「友達？」 声が聞こえた。

「ギャー！！！！」 私、びっくりして大声だしちゃった！！ 尻もちついちゃった！！

「こっここちゃん…！」

いつの間にか、後ろにここちゃんが居た。

「何かの罰ゲーム？ そう言って逃げてこいって言われたの。」 ここちゃんが下を向きながら、小さな声で言った。

「ちっ違っの！ 本当に友達になりたくて…。」 私はここちゃんに近寄りながら言った。

私が近寄ったと同時に、ここちゃんが一步下がった。

「いつも一人で此処に来てるの？」 私は出来るだけ優しく言った。
「…うん。」 ここちゃんは小さくうなずいた。

「何か凄いいよね！此処お化け屋敷って言われてるの知ってる？こちゃんさあ、一人で入ってるから凄いいよね！」今度は尊敬してみた。

どう言ったら、私に心を開いてくれるんだろう？

「怖くないの？私は一人じゃ入れないよ…。いつも此処で遊んでるの？」

「…うん。」

「…此処はね、あたしの秘密基地なの…」こちゃんが小さな声で言った。

初めてこちゃんから喋ってくれた…。

「…こっちに来て…」こちゃんが小さな声でそう言うと、教室らしき所に歩き出した。

私はこちゃんの後に付いて行った。

「…何か凄いいね…。思ったより綺麗だったんだ…。此処…。」私は教室らしき所に入ってビックリした。

小さな黒板、その周りに小さな机と椅子が数個、綺麗に並んでいた。

きつと、此処は園児達の教室だったんだ…。

こちゃんが床も机も綺麗にしてたんだ…。

「…本当にあたしと友達になりたい？」こちゃんが真っ直ぐ私

を見て言った。

「うん！私…前からそう思ってたの…でも、なかなか言い出せなくて…その…」

…そう…私、ここちゃんが嫌われてるの知ってて、本当は言い出せなかったんだ…。

「…あたしが嫌われ者だからでしょ？」ここちゃんが言った。私、何だか凄く恥ずかしくなって、下を向いてしまった。

「…あたしと友達になんかなったら、あんたまで嫌われちゃうよ？」ここちゃんは少し笑いながら言った。多分、冷めた笑いっていうのかな…冷たい笑い顔。

「…私、本当にここちゃんと友達になりたい！！」にそう思ったから、私は此处まで追って来たんだ。

私は彼女に惹かれて来たんだ。

「…本当に？あたし…嫌われ者だよ？学校行っただって、誰も相手してくれない子だよ？あたしと友達になんか、なっちゃダメだよ！出てって！！もう十分だよ！！あたしは一人で十分なの！！」

ここちゃんは、半分怒鳴ったような声で…でも、涙声で言った。

「いいの！！私、決めたの！！ここちゃんは私の友達！！」私は大声で言った。

ここちゃんの胸に届く様に。

しばらく、二人とも黙ったままだった。でも、ここちゃんは下を向いて泣いていた。

嗚咽が聞こえたわけじゃないけど、床が涙でじんわりと濡れてたから分かったの。

どれ位たったのかな…？

「…あたしね、本当は寂しくて、辛くて…友達何て一生出来ないと思ってた。あたしはずっと一人だって…一人で生きていかなきゃって…。」ここちゃんが声を絞りました出しながら言った。

この子はずっと寂しかったんだ…。私が同じ立場だったら耐えられた？きつと無理だった…。そう思うと、私まで寂し気持ちになって来て、泣けてきた。

「ゴメンね…。ゴメンね…。」そう言いながら、私も泣いちゃった。

「…どうして泣くの？どうして謝るの？分かったよ…あたし、頑張って友達してみる…。今日から友達。秘密基地、使っていいよ。」

ここちゃんが、まごまごしながら言ってくれた。

「本当…！！私、凄く嬉しい！！今日から友達！！私、本当に嬉しいよ！有り難う、ここちゃん！」

本当に嬉しかった。心に引っ掛かっていたものが、取れた気がした。

私、何となくだけど、これから楽しい事が待っている気がしたの。

多分、この予感は当たってる！！

「ここちゃん、宜しくね。私、珠希。」

手を差し出した。小さな手が私の手を握った。

「あんた…変なヤツ…。」ここちゃんが笑った。

初めてみた笑顔だった。

気が付くと、辺りが薄暗くなっていた。

4月の終わり頃だった。

「ねえ、ここちゃん、もう戻ろっ？暗くなってきたし。それに、今日新しい子が来るんだって！」

私も笑顔でここちゃんに言った。

二人で秘密基地を後にした……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6673d/>

FIVE CAT

2010年12月30日21時46分発行